【教育研究ノート】

メッセージカードによる発表者全員へのフィードバックの試み

中国における日本語スピーチ大会の実践から

菅田　陽平 *　　駒澤　千鶴 †

キーワード
中国の日本語教育，スピーチ大会，メッセージカード，フィードバック，アクティヴ・インタビュー

1. メッセージカードとは

「スピーチ大会[1]」という言葉を聞いた時，どのようなイメージを持つだろうか。そして，もし，あなたが外国語教師の経験を持っているなら，一度はスピーチ大会に参加する学習者の指導に携わった経験があるのではないだろうか。もしくは，あなた自身が目標言語として学ぶ言語のスピーチ大会に参加した経験があるかもしれない。さて，イメージする，もしくは，実際に経験したスピーチ大会はどのような形式で実施されているだろうか。

図1の写真は，2017年6月3日に，北京市の在中国日本国大使館で開催された第35回北京日本語教師会杯日本語スピーチ大会で撮影されたものである。机の上に並べられているのは，スピーチの発表者39人全員に向けた39枚のメッセージカードである。各カードには，スピーチに対する想い，感想，評価などがメッセージとして書かれている。メッセージの書き手は，審査員，会場のスタッフ，そして，一般の観客である。

本稿は，筆者2人がスピーチ大会の発表者のパフォーマンスに対するフィードバックの改善を検討した実践研究である。中国・北京で日本語教師としてスピーチ大会の運営と発表者のスピーチの指導に携わり，北京で行われている従来のスピーチ大会の在り方に関して，以下の共通する問題意識を持ち，その改善を目指し，実践研究に着手した。

それは，発表者に対する評価方式が発表者の得点による順位付けに留まり，スピーチのパフォーマンスに対するフィードバックが乏しいという点である。スピーチ大会は，教育現場の1つであるにも関わらず，通常の「教室内におけるスピーチ発表」の際に行われ得るような，発表者全員に対する想い，感想，評価を伝えるフィードバックは，管見の限り見当たらない。しかし，筆者らはスピーチ大会においても発表者全員がそのようなフィードバックを受けられる仕掛けを作ることができるのではないかと考えた。また，その際には，伝える方法を工夫することにより，審査員のみならず，観客やスタッフからのフィードバックを発表者に届けることも可能だと判断した。

そこで，筆者らは従来のスピーチ大会では見られなかったフィードバックの形式を模索し，具体的には，発表者とスタッフ，観客をつなぐことに焦点を当てたフィードバックを試みた。次節から

* 北京大学（Eメール：sugata1987@pku.edu.cn）
† 北京大学

1 場合によっては，「スピーチコンテスト」，「弁論大会」といった用語が使われることもある。そこで，本稿では，テーマについて，文章を考え，それを暗記し，観客により伝わるようなジェスチャー，抑揚，表情などを工夫し，練習を重ねた上で発表するというイベントについて，「スピーチ大会」という用語で統一する。また，本稿における「スピーチ大会」とは，対外的な大会のみを指し，日常の授業実践で行われるスピーチに関しては，「教室内におけるスピーチ発表」と表記を分けることにする。

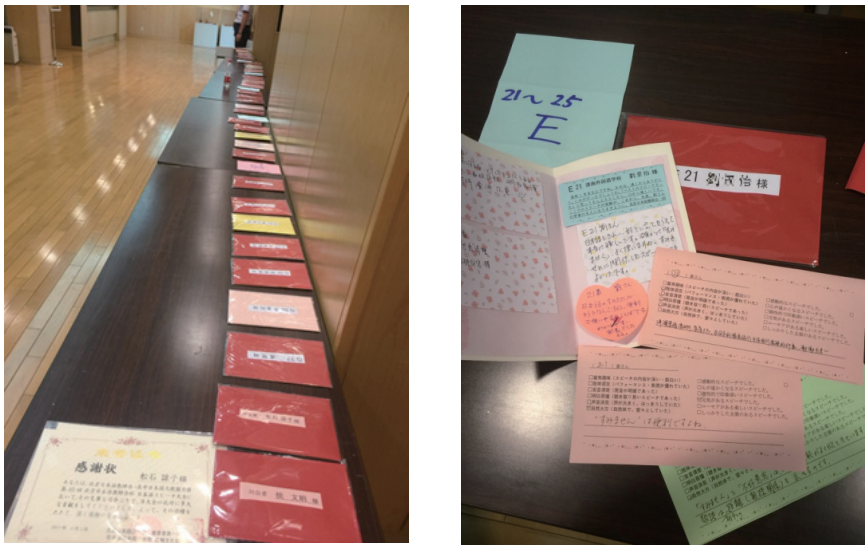

図 1．第 35 回北京日本語教師会杯の発表者に送られたメッセージカード

は，この実践に至るまでの研究背景と問題意識を紹介し，新たなフィードバックの実施とその結果について検討する。

2．研究背景

国際交流基金が実施した「2015 年度海外日本語教育機関調査」（国際交流基金，2017a）によると，中国における日本語学習者の総数は，95 万 3283 人であった。2012 年度に行われた前回調査と比較すると，英語学習の高まりを背景に，高等教育機関において，日本語を専攻する学習者数，そして，日本語学部の設置校数は減少傾向を見せているものの，現在においても世界第 1 位の規模である。この統計は，初等・中等・高等教育機関，および，民間の語学学校などに所属する学習者数をまとめたものである。これ以外にも，DVD，独習用教材，インターネット上の講座などを利用した独学者も含めると，数字に表れない数の学習者の存在が見込まれる。

現在，国内外の日本語教育の現場において，日本語学習者を対象にしたスピーチ大会が開催されている。それは，中国でも例外ではなく，各教育段階，特に，大学をはじめとする教育機関単位や地域単位で盛んに開催されている。中には，全国大会，世界大会につながるような大規模な大会も存在する。また，大会の主催者も教育機関，一般企業，日中友好団体，日本語教師会と多岐にわたり，これらが共催の形をとることも少なくない。

深澤，ヒルマン小林（2012）は，海外で日本語教育に携わる日本語教師にインタビュー調査を行った。それによると，スピーチ大会への参加が日本語学習者にとって，日本語を総合的に使用する機会になり，学習意欲の強化になると捉えられていた。また，金久保（2016）は，海外における日本語スピーチ大会には，評価基準の明確化，スピーチ指導における教師の過重な負担の軽減の必要性といった問題があるにせよ，発表者にとっても，主催者にとっても，メリットがあるため，実施されてきたということを述べている。

中国におけるスピーチ大会の実践研究としては，藤田，フランプ（2009）が挙げられる。この研究は，重慶大学で実施された校内スピーチ大会の指導に「ピア・ラーニング[2]」が取り入れられ，日本語を専攻する学習者の主導でスピーチ大会の運営が行われたことを報告している。この試みでは，上級生と下級生がグループを組み，交流する形式で，スピーチ大会が実施されていた。その結果，上級生・下級生双方の「学び合い」が日本語力の向上に結びついたことが示唆されており，「ピア・ラーニング」を応用したスピーチ大会の運営の可能性が述べられている。加えて，深澤，陳，張（2012）は，「全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選」に参加した大学生へ聞き取り調査を行い，スピーチ指導を受けた学習者が指導を

2　ここでは，「ピア（peer：仲間）と協力して学ぶ（learn）方法」であり，「仲間と学ぶという活動を通して，教室を社会として位置づけ直す試み」（池田，舘岡，2007，p. 51）として定義した形で，引用が行われている。本稿でも，この定義を採用する。

受けていない学習者に比べ，独話能力が鍛えられていたことを明らかにした。そのため，一般的に海外の学習者が習得しにくいとされる独話能力の育成のため，日常の授業からスピーチ指導を行うことが提案されている。

以上の研究から，スピーチ大会への参加が学習者にとって，単に学習成果を発表する活動にとどまらず，「能動的に学ぶ」という教育的意義を持った活動でもあることが伺える。日本国内とは異なり，海外の日本語教育の現場において，学習者は，教室外で日本語を使用する機会に乏しいことも多い。中国国内でも，スピーチ大会は，日本語学習者の学習成果を発表する場として重視され，数多く実施されているという事実がある。

つまり，スピーチ大会は，発表者の学習経験を豊かにする可能性を持った場であると考えられる。しかし，その重要な構成要素であるフィードバックの部分に関しては，「順位付け」のみが自明なものとされ，それ以外のフィードバックの形式について検討が行われた研究は管見の限り，見当たらない。

3. 問題意識

本稿は，筆者2人による対話を通して執筆が行われた。菅田[3]，駒澤[4]とも，本稿のフィールドである「北京日本語教師会杯日本語スピーチ大会」を運営する北京日本語教師会のメンバーである。筆者らは，この教師会において6年ほどの親交があり，さらに実践研究などを通し，対話を続ける中で，互いの教育観に親和性を見出す関係にある。

筆者らは，中国国内で開催されているスピーチ大会の運営，発表者への指導に携わる中，スピーチ大会のフィードバックの形式に関して，共通する問題意識を持った。このことが，本稿執筆のスタートラインである。

現在，「教室内におけるスピーチの発表」が行われる際には，教師が事前に評価表，コメントシートなどの準備を行い，発表者は，発表後に，聴衆となったクラスメートからフィードバックが得られることが少なくないだろう。しかし，スピーチ大会においては，そのような「仕掛け[5]」作りがなされていることは稀である。

また，筆者らがスピーチ大会に携わる中で実際に感じるのは，スピーチ大会の審査員，観客，スタッフが大会前・大会中・大会後に得られる想いが少なくないということである。そう感じるのは，筆者が運営・指導の過程において，大会に関わる人々が多くの想いを抱き，その想いを口にするのを直接見聞きしてきたからである。特に，発表を聞いての想いをメッセージとして，発表者に直接，届けられたら，それは発表者の学びにつながり，日本語学習の意欲を高め得るのではないかと考えてきた。

しかし，以上のようにメッセージが発表者に届く手段，機会，仕掛けが用意されている大会は，筆者が知る限り稀である。想いというものは，発表者に届く機会が得られなければ，伝わることなく消えていってしまう。筆者らはそれをとても惜しいことだと感じた。

加えて，筆者らは，スピーチ大会の指導を行った発表者から，大会後，入賞できなかったことについて謝罪を受けたという経験[6]を持っている。その発表者に理由をたずねると，入賞できなかったことを自らの努力不足に帰結させ，所属機関や指導を受けた教師に対する罪悪感を持っていることが伺えた。

3　菅田のプロフィール：2012年に初任日本語教師として，北京市に隣接する河北省の大学の日本語学科に着任し，北京日本語教師会のメンバーとなる。北京日本語教師会での活動を通し，駒澤と日本語教育の実践に関する意見交換を行う間柄となる。その後，上海，北京と職場を変え，2015年からは，北京の大学の博士課程に所属している。

4　駒澤のプロフィール：1996年から，2年の中断期間をはさみ，計20年間にわたり，天津市・北京市において，日本語教師として日本語教育に携わる。北京日本語教師会の活動開始時（1997年6月）からのメンバーである。

5　中国の高等教育機関における実践報告としては，中国の大学生を対象とする日本語スピーチ授業で，「ピア・フィードバック」活動を試みた鳥井（2013）の例が挙げられる。

6　この部分の執筆にあたり，中国に10年以上滞在している2人の日本語教師に聞き取りを行った結果，入賞を逃した学習者から謝罪を受けた経験があるということがわかった。筆者2人を含めた，4人に共通するのは，このような謝罪を奇異なものとして感じた点である。また，同様の事例は，この2人以外からも定期的に見聞きするものであり，ある程度，中国の教育現場では一般的な出来事であると判断できる。

そもそも，2004年に北京日本語教師会杯の開催を発案したのは駒澤である。それは，スピーチ大会への参加が，発表者にとって，学習者自身の学習経験を豊かにする場であってほしい，そして，入賞を逃したことで学習者が罪悪感を持つようなことがあってほしくなかったからである。そのような大会を実現するには，想いを同じくする仲間とともに，スピーチ大会を開催するしかないと駒澤は考えた。

本稿を執筆するにあたり，まず，駒澤が北京日本語教師会杯に関する10数年にわたる経験の内省を行い，記述を作成した。菅田はその記述を読んだ上で，駒澤に対し，「アクティヴ・インタビュー」（Holstein & Gubrium, 1995）を行った。これは，インタビュアーと回答者の両者が積極的に関わり，コミュニケーションを通して，意味を組み立てていくインタビューを指す。その上で，双方が納得する記述が作成されるまで，語り合いを通して，記述の再構成を続ける。この方法により，実践者それぞれが「他者の視点」を利用しつつ，自らの実践に新たな意味付けの可能性を見出そうとした。次項では，北京日本語教師会杯の運営母体北京日本語教師会，さらに，北京日本語教師会杯そのものについて，より詳しい説明を行いたい。

4. 北京日本語教師会，北京日本語教師会杯の紹介

4. 1. 北京日本語教師会

北京日本語教師会は，北京市または北京近郊で日本語教育に関わる者の自主的な集まり[7]である。設立は，1997年6月30日であり，現在までの約20年間，年8回程度，定例会が開かれ，その開催総数は100回を超える。定例会では，日本語学習者にどのように日本語を教えたらよいかなどの教育現場の問題などについて情報交換が行われ，また，互いの教育技術を研鑽し合うことを目的とした活動が行われている。さらに，北京日本語教師会は，2004年から北京日本語教師会杯の運営も行っている。

4. 2. 北京日本語教師会杯

北京日本語教師会杯は，北京を中心とする日本語学習者に，日頃の学習成果を発表する機会を提供し，学習者の自己実現と学習意欲の向上を目的に行われている大会である。北京日本語教師会の会員有志により，2004年3月12日に第1回大会が実施され，2018年5月19日の大会で第36回を数える。

開始当初の3年ほどは，国際交流基金北京日本文化センター運営による日本語サロンと連携した形で，長期休暇期間以外，毎月1回の頻度で開催されていた。当時は，日本語を使い，交流する機会が現在の状況と比較しても，乏しかったことから，居場所を求めてやってきた学習者と日本語教師が手作りで企画・運営を行う発表会という雰囲気が強かった[8]。

また，単にスピーチ大会を行うだけでなく，「SHOW & TELL」の要素を加え，何かを見せながら話してもらうスピーチ，グループによるスピーチ，「何かになりきって行うスピーチ」を導入するなど，個性豊かな発表者の存在が活きる発表形式について試行錯誤する場としても機能していた。具体的には，学習者の意見を吸い上げ，スピーチにとどまらず，朗読，カラオケ，演劇，紙芝居などが企画された。つまり，学習者の好きなもの，得意なもの，グループによる協働などが活きる発表をしてほしいといった発想から，「競争や順位付けを目的とせず，参加者の自己実現を重視する」という方針による企画が少なくなかった。

7 国際交流基金（2017b）によると，正規の学校教育においては，中国・教育部（日本の文部科学省に相当）に直結した形で教育段階別に関係者のネットワークが存在している。特に，高等教育段階では，教育部に「日本語専攻・非専攻別」の外国語教育指導委員会日本語部門が設けられており，シラバス制定，教材制作，試験問題作成などを行っているほか，それぞれ「中国日語教学研究会」，「大学日語教学研究会」などがあり，中国人教師を中心に，研究活動や学会活動が行われている。このほかに，各地域の教師による情報交換や定例会を目的としたネットワーク活動が見られる。北京，上海，南京，天津，瀋陽，大連，長春，西安，無錫，合肥，西寧，済南などには，日本人教師を中心とした日本語教師会が存在しており，本稿で紹介した北京日本語教師会もここに含まれる。

8 開始当初の北京日本語教師会杯では，「順位をつけることよりも，発表者の自己実現を優先する」という共通認識のもとに運営されていたため，あえて「日本語発表会（傍点筆者）」という名称にこだわり，「○○大会」，「○○コンテスト」という名称は避ける傾向があった。

その後，2008年から2012年までの休止期間を経て，2018年現在は，半年または1年に1回の頻度で開催されている。現在は，在中国日本国大使館，国際交流基金北京日本文化センターの多目的ホールなどで実施されている。

毎回の大会は，立候補した1～2人の責任者による企画で実施されることになっており，その内容も責任者の企画に任されている。ここ数年は，スピーチ大会，朗読大会，歌唱大会などが実施された。また，グループによる発表という企画も少なくない。初期の北京日本語教師会杯と比べ，開催頻度こそ変化が見られたものの，「学習者の自己実現を目指した発表の場づくりを目指す」という運営は，現在まで引き継がれている。

北京日本語教師会杯の特徴は，以下の4点に集約される。

① より多くの学習者に発表の機会を提供する
② 審査は可能な限り，公正を期す
③ スポンサーをつけず，低予算での運営を目指す
④ スピーチ大会を「発表者⇔発表者」や「発表者⇔観客・スタッフ」の交流の場と捉える

① より多くの学習者に発表の機会を提供する

そのため，プログラムを簡素化しようとしている点が挙げられる。開会後は，大会ルールの説明が行われると，来賓からの挨拶を交えず，参加者の発表へと進むことも珍しくない。他にも1～2分以内という短めのスピーチをしてもらうことにより，発表者数を可能な限り，増やそうとしてきた。それにより，現在でも一回の大会の発表者数が40人を超えることも多い。

② 審査は可能な限り，公正を期す

審査員がより公正な審査を行えるように，発表者は発表中，所属機関名や学年について述べることが禁止されている。これは，審査員の先入観を可能な限り排し，ハロー効果[9]を防ぐためである。

③ スポンサーをつけず，低予算での運営を目指す

北京日本語教師会杯は，基本的にスポンサーをつけず[10]，教師会会員による個人的な寄附と発表者1人から10人民元（約170円，賞状の代金程度）の参加費用の徴収で運営されている。

スポンサーをつけない理由は，北京日本語教師会杯のスタッフの業務を増やさないためである。スポンサーをつける場合，担当者は日常業務に加え，スポンサーとなってもらえる企業・団体探し，条件についての折衝などの業務が課せられることになる。それが原因で担当者が疲弊するような事態を避けるため，低予算での運営に知恵を絞ってきた。

④ スピーチ大会を「発表者⇔発表者」や「発表者⇔観客・スタッフ」の交流の場と捉える

2004年の第1回大会から現在まで，北京日本語教師会杯は，「せっかく同じ会場に集った者同士，わずかな時間でも交流しようではないか」という考えのもとに運営が行われてきた。日本語サロン[11]との共催期から，各参加者の発表後には，審査結果が出るまでの時間を利用し，発表者，観客，スタッフが参加する交流活動の時間を設けることが少なくなかった。現在の北京日本語教師会杯の運営にも，その試みは引き継がれている。具体例を挙げると，全員参加の自己紹介，クイズ大会，けん玉大会，グループを組んだ上での名刺交換などが行われている。

加えて，北京日本語教師会杯には，審査員が選

9 ある対象の評価をする時に，その対象が持つ属性や特徴に引きずられ，それ以外の特徴についての評価が歪められる現象を指す。

10 ただし，在中国日本国大使館を会場とする場合のみ，在中国日本国大使館文化部との共催で行われている。それ以外の会場で実施される場合は，北京日本語教師会による単独開催が基本である。なお，助成金申請の機会を利用し，会場使用費の支援を受けたことはある。

11 当時，北京日本語教師会杯は，日本語サロンの時間の直後に連続して開催されており，北京日本語教師会杯の発表者，スタッフも日本語サロンの活動に参加していた。また，日本語サロンに参加するためにきたメンバーが，北京日本語教師会杯の観客となることも多かった。さらに，日本語サロンへやってきた人が北京日本語教師会杯に発表者として飛び入り参加をすることも歓迎されていた。

ぶ賞[12]とは別に，観客の投票によって決まるオーディエンス賞という賞が設定されている。この賞は，2004年の第1回大会から，現在まで継続されてきた賞である。このオーディエンス賞を設けたのは，北京日本語教師会杯を見学する観客にも北京日本語教師会杯の「参画[13]者」であるという意識を持ってほしいと考えていたからである。

以上のように，北京日本語教師会杯は，最低限の予算のみで，学習成果の発表の機会をいかに多く日本語学習者に提供するのか，また，学習者の学習意欲をいかに高めるのかという視点から実施されてきた。そのため，発表者の自己実現の助けとなるような新たな試みが積極的に許容される雰囲気を持っている。

実際に，本稿で取り上げているメッセージカードによる参加者全員へのフィードバックの試みも，豪華な賞品は贈ることができないにしても，会場に集まった観客の想い，感想，評価をメッセージという形にして，発表者に贈りたいという発想から生まれた。また，メッセージであれば，低予算で発表者全員に贈ることができる上に，日本語学習者にとって，観客からのメッセージを受け取ることは，「賞品を受け取ることに等しいのではないか」という何気ない発想から生み出されたものである。そういった意味では，メッセージカードの実践は，北京日本語教師会が持つ環境や雰囲気によるものだと言えよう。

5. メッセージカード導入の過程

5. 1. 発表者全員へのメッセージカードの贈呈を思いついた駒澤の体験

発表者全員へのメッセージカードの贈呈という着想を得るに至った駒澤自身の体験としては，以下の3つが挙げられる。

① 学習者からの寄せ書き，手紙，カードに元気づけられた

日本語教師をしていると，最終授業の後に，寄せ書き，手紙，カードをもらうことがある。駒澤は，授業準備に行き詰った時，自信をなくした時に，取り出して眺めることが少なくない。それは，そこに書かれている学習者の言葉に元気づけられるからである。この体験から，想いがこもった言葉を受け取ると，その言葉は，たとえ時間が経ったとしても，贈られた者を励ます力があるという可能性を実感した。

② 評価表を読み返し，元気を出したというメールを受け取った

駒澤は，20年ほど前から，授業中，学習者に発表してもらう際には，発表を聞いて得られた想い，感想，評価を学習者同士で共有してもらうための仕掛けを用意している。それは，その時の発表内容に合わせた評価表や付箋などである。その際には，足りない部分を指摘し合うというよりは，良かった部分を認め合えるような仕掛け作りを心がけてきた。それは授業の発表を通し，学習者の自己実現が図られ，自己尊重と他者尊重の雰囲気を高めるためでもある。

2007年，学習者から，「留学中，辛く感じた時，以前，授業中にクラスメートが書いてくれた評価表を読み返し，元気を出した」というメールを受け取った。この体験を通し，想いがこもった言葉は，継続して発表者に力を与えるものであると考えるようになった。

③ 実践を通して想いを伝えることの大切さを認識してきた

スピーチ大会において，発表者に想いを伝えることの大切さを実感したきっかけは，駒澤の日常の授業実践の中で学習者の成果物に対するフィードバックの内容が変化したこととも関連がある。駒澤は，20年間の日本語教育の経験の中で，当初は，学習者の日本語を「正しく直す」ことに力を入れていた。しかし，現在では，その内容に関して，「一人の人間としてどのように感じたのか」という想いを書くというフィードバックを特に心がけるようにしている。

そうするようになったきっかけは，「赤字で直された作文が返ってくると，悲しくなる」，「大学

12 現在の北京日本語教師会杯の賞の内訳は，大会参加者のパフォーマンスを得点化した上で，一等賞1人，二等賞2人，三等賞3人となっている。それ以外の参加者には，全員に奨励賞と呼ばれる参加賞が授与されている。また，企業などから招いたゲストによる特別賞やここで取り上げた観客の投票によるオーディエンス賞が設定されている。なお，入賞者には，13人民元程度（約200円）のメダルが贈呈される。

13 本稿では，「参画」という言葉を「自分が参加しているその場自体の『場づくり』すなわち，『授業づくり』に参加する勇気と手間（コミットメント）を必要とする（林，2015，p. 2）」ものだと定義する。

時代，教師が作文を褒めるコメントを書いてくれた。それが嬉しくて，その後，数年間，そのコメントを筆箱に入れて持ち歩いた」といった学習者の語りを聞く機会があったからである。

以上，3点が，駒澤がメッセージカードを届けたいと感じるきっかけとなった体験である。

5．2．発表者全員へのメッセージカード贈呈に賛同した菅田の体験

2012年9月，菅田は初任日本語教師として，中国・北京市に隣接する地方都市の大学の日本語学科に外国人教師として赴任した。そして，2012年10月，授業実践の共有や他の日本語教師との交流を目的に，北京日本語教師会の会員になった。それにより，北京日本語教師会杯に所属大学の学習者を参加させる権利を得た。そこで，菅田は学習者に北京日本語教師会杯への参加を呼び掛けることにした。

赴任先の大学は，北京首都圏の一角に位置しているにも関わらず，学習者が日本語を使い，他者と交流する機会が極めて少ない状況にあることを赴任当初から認識していた。それにより，北京日本語教師会杯への参加を呼び掛ける過程で，地方都市の学習者にとって，首都北京で開催されるスピーチ大会への参加は，言語能力を伸ばす機会であるという認識だけでなく，大都市の学習者と競うことにより，自らの力を知り，試せる場所という認識が加わったことがわかった。そのため，赴任先の学習者を北京日本語教師会杯へ2回引率し，計6人の学習者を出場させた。

当初，菅田は指導にあたり，6人の学習者の多くが入賞を強く希望していることを知り，そのための支援を心がけていた。その理由としては，成功体験を通して，地方大学に所属する学習者が大都市の学習者と比べても，遜色がない存在であると認識し，日本語学習への自信を深めていってほしかったということが挙げられる。

菅田は年度末の2013年7月，自らの一年間にわたるスピーチ指導を振り返るために，大会参加者6人を集め，北京日本語教師会杯に参加した感想について聞き取りを行った。その結果，以下の内容について知ることができた。

まず，北京日本語教師会杯への参加の動機としては，全員が「学んだ日本語を発表し，自らの力を試したい」という点で一致した。また，他大学の学習者のスピーチを聞くことで，自らの日本語能力を確かめたいという欲求が参加者の意見に反映されていることもわかった。次に，参加者全員が自身と他の参加者のスピーチの違いを意識し，発音，アクセント，イントネーションなどの重要性を再認識していた。加えて，自身のパフォーマンスに関する具体的な指摘や改善のアドバイスを求めている点でも全員が一致した。

中には，北京日本語教師会杯終了後に個人的に審査員に自らのスピーチに対するコメントを聞きに行った参加者もいた。その参加者は，審査員から専門的かつ具体的なアドバイスを受けた経験を「言語学が専門の先生から音声に関する詳しいアドバイスをもらうことができて，すごく嬉しかった。それまで知らなかったことを知ることができて，北京まで行った甲斐があった。その次の日から日本語の勉強をもっと頑張ろうと強く思った」

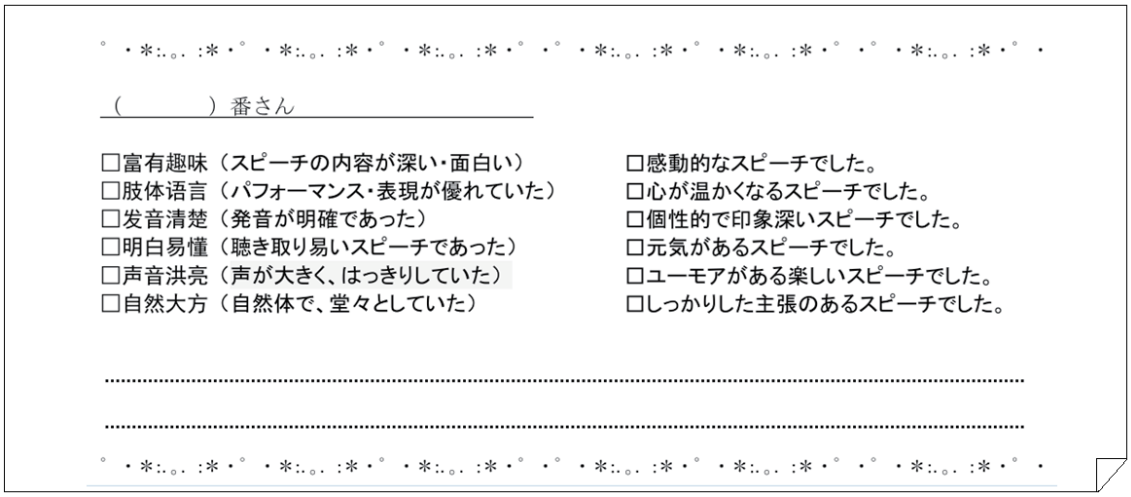

図2．メッセージカードに挟み込まれたメッセージシート：シート下部の二行は自由記述欄となっている。

と振り返っている。なお，スピーチ大会の順位付けに関しては，参加者の一部からは，「自分が素晴らしいと思った人が賞を取れずにびっくりした。意外だった」という感想も聞かれ，スピーチに対する審査基準について，詳しく知りたいという声も上がった。それ以外に，「結果の優劣を競うことよりも大会への準備段階での努力を重要視する」，「他者からの具体的なメッセージによる評価を望む」という意見も出た。

このような参加者の意見に触れた菅田は，「首都での大会に入賞することが地方都市で日本語学習に奮闘する学習者の学習意欲を高めるだろう」という当初の予想と学習者の考えが必ずしも一致しないことに気づいた。そこから，「単に結果だけに視点を置き，指導を行うべきではない」という考えへと教育観の変容が起こった。そして，スピーチ大会の終了後，発表者には，順位付けというフィードバックだけでなく，何らかの形で，具体的なメッセージが伝えられるような仕掛け作りができないかと模索[14]するようになった。

5. 3. メッセージカードの導入が実現した経緯

現在の形で，北京日本語教師会杯にメッセージカードの試みが導入されたのは，2016年11月の第34回大会からである。北京日本語教師会杯は，2012年以降，立候補した責任者の企画のもとで，運営されるようになった。第34回大会の責任者に立候補したのが菅田であった。この第34回大会の企画にあたり，駒澤から発表者全員へのメッセージカードの贈呈という試みが提案され，菅田がその提案に賛同したことで実現した。

第34回大会当日，筆者らは，審査員をはじめ，運営スタッフ，引率の日本語教師，見学に来ていた観客に声をかけ，メッセージシートや付箋にメッセージを書いてもらった。図2は，その時に用意されたメッセージシートである。全員の発表が終わると，そのメッセージは，スタッフの手により，メッセージカードに挟み込まれた。1枚のカードに，少なくとも5枚以上のメッセージシートや付箋が入れられていた。つまり，観客5人以上からの想いが発表者全員にメッセージカードという形により，届けられたことになる。

このメッセージシートの評価項目は，2006年に駒澤が担当していたクラスの学習者数人により，考案されたものである。学習者がこのメッセージシートの内容を考案するに至ったのは，駒澤から学習者への問いかけによる。その問いかけとは，「自分が何かについて発表する場合，どのような点についてコメントがほしいのか」というものであった。駒澤は，2006年以降，その評価項目を教室内におけるスピーチ発表の際に，評価表の内容として使い続けてきた。それを北京日本語教師会杯のメッセージシートの項目としても採用した。なぜならば，それらは，学習者がコメントをしてほしい項目として挙げたものである以上，教室内におけるスピーチ発表，スピーチ大会における発表に関わらず，発表者が望む評価項目に近いと考えたからである。

後日，筆者らはメッセージカードに関する感想が発表者のSNSに掲載されていることを他の日本語教師から送られてきた写真を通して知った。それが，図3の写真である。そこには，「今日の

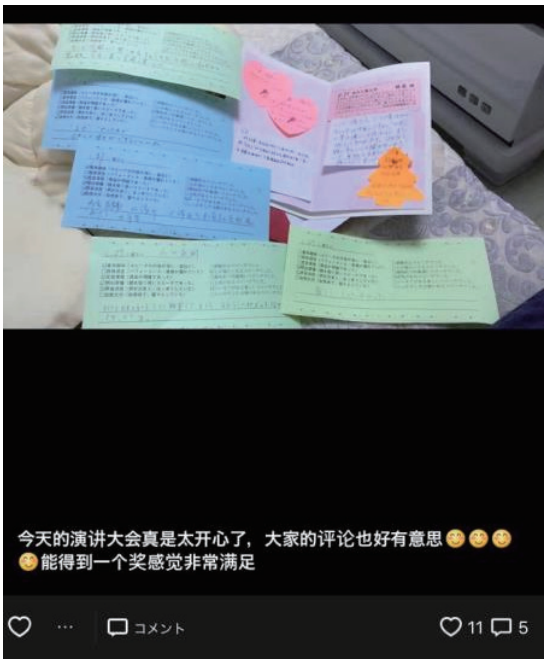

図3. 第34回北京日本語教師会杯の発表者の一人が行ったSNSへの投稿

14 菅田がその当時のことをふり返り，まとめたものが菅田，潘（2014）である。その中には，参加者全員がパフォーマンスについて分析するための助けとなる「技能別コメントシート」の導入が提案されている。この「技能別コメントシート」の目的は，参加者と指導を行う日本語教師のふり返りを促すことにある。この試みは，2014年当時は，実現しなかったものの，いつかはスピーチ大会において，参加者全員へ詳細なフィードバックができるような仕掛けを実現させたいと菅田が考えるきっかけとなった。

スピーチ大会は本当に楽しかった。みなさんからのコメントもとても面白く，まるで，賞をもらったかのような大きな満足感が得られた。（原文中国語，日本語訳は菅田による）」と書かれていた。この画像を見た時，筆者らはメッセージカードには，発表者の心を動かす機能があることが確信でき，大きな嬉しさを感じた。

その後，北京日本語教師会杯のふり返りにおいても，発表者全員へのメッセージカードの贈呈という試みを今後も続けていきたいという意見が挙がり，その後も，現在まで2回継続して実施されている。

6. 今後の展望

ここまで述べてきたように，筆者らは，北京日本語教師会杯において，発表者とスタッフ，観客をつなぐ新たなフィードバックの実施として，発表者全員へのメッセージカードの贈呈という実践に携わってきた。今後は，メッセージカードそのものの形式や内容に関しても，発表者やその指導を行う日本語教師へのニーズ調査を基に改訂していくことが可能だろう。

また，本稿の執筆を通し，再認識したことは，筆者らが北京日本語教師会杯を「実践コミュニティ（Commnity of Practice）[15]」の1つとするべく，工夫を重ねてきたということである。そして，今後もさらにそのような運営を行っていきたいと願っている。

そのためには，以下の点で更なる工夫が可能だろう。これまでのような「対面型コミュニティ」には，時間的・距離的な制約がつきものである。そこで，筆者らが注目しているのは，ICT（Information and Communication Technology：情報通信技術）を活用し，発表者同士をつなぐという試みである。例えば，中国の無料通信アプリWeChat（中国名:微信）[16]を使った試みは，今後，更なる発展が見込まれる。

既に，筆者らは，WeChatのグループチャット機能に注目し，中国国内におけるイベントやコミュニティを運営する際に，情報交換や実践の紹介を行い，WeChat上での「実践コミュニティ」の形成を試みている。ICTの活用は，「対面型コミュニケーション」における距離的な限界と時間的制約を超え，費用の面でもほぼ問題なく，「インターローカルな知」（舘岡，2015）の構築を促進できる可能性を持っている。メッセージカードと組み合わせて使うことにより，「外国語学習の実践コミュニティ」（トムソン木下，2017）の学びの仕掛けとして，活用していくことができるはずだ。

北京日本語教師会杯を主催する北京日本語教師会は，日本語教育に関わる者の自主的な集まりであり，教育現場の問題について情報を交換し，互いの教育技術を研鑽し合うことを目的としているコミュニティである。その意味で北京日本語教師会も「実践コミュニティ」であると言えよう。そして，そのような組織のもとでの北京日本語教師会杯は，「本来，スピーチ大会とはこうあったほうがいいのではないか」という個々人の想いを実現するための挑戦だったと言える。発表者全員へのメッセージカードの贈呈は，その挑戦の一側面であった。

北京日本語教師会杯は，一般的なスピーチ大会の実施方法への「改善」からスタートした。しかし，実は，それはスピーチ大会の在り方そのものの「改革」であったとも言えるのではないだろうか。「実践コミュニティ」には，そのような「改革」を推し進める潜在力があると言える。北京日本語教師会杯が日本語学習者にとって，更に有用な機会になるよう，今後も引き続き，企画・運用・実施方法などに工夫を重ねていきたい。

15 ウェンガー，マクダーモット，スナイダー（2002/2002）は，「実践コミュニティ」について，「あるテーマに関する関心や問題，熱意などを共有し，その分野の知識や技能を，持続的な相互交流を通じて深めていく人々の集団である」（p. 33）と定義しており，本稿もこの定義に従う。

16 WeChatとは，中国の大手IT企業 テンセントが開発した大規模クループチャット型SNSであり，インターネット電話やテキストチャットなどが無料で利用可能なアプリケーションである。データファーム（2015）によると，WeChatは2011年1月にサービスが開始され，2015年2月の時点で加入者数は11億2千万人，月間アクティブユーザー数は，5億人まで拡大している。中国の日本語教師や日本語学習者にとって，非常に身近なコミュニケーションツールであると言える。

文献

池田玲子，舘岡洋子（2007）.『ピア・ラーニング入門 ── 創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房.

ウェンガー，E.，マクダーモット，R.，スナイダー，W. M.（2002）.『コミュニティ・オブ・プラクティス ── ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』翔泳社.（Wenger, E., McDermott, R. A., & Snyder, W. (2002). *Cultivating communities of practice: A guide to managing knowledge*. Harvard Business Review.）

金久保紀子（2016）. 日本語スピーチコンテスト実態と課題『筑波学院大学紀要』11，13-23. 筑波学院大学.

国際交流基金（2017a 年 3 月）.『2015 年度　海外日本語教育機関調査』. http://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey15.html

国際交流基金（2017b 年 10 月）.『中国（2017 年度）── 日本語教育 国・地域別情報』. https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/china.html

菅田陽平，潘寧（2014）. 中国における日本語スピーチ大会の改善に向けて ── 参加者の声から考えるフィードバック形式『日本語教育方法研究会誌』21(1)，12-13.

舘岡洋子（2015）. 日本語教育における質的研究の可能性と挑戦 ──「日本語教育学」としての自律的な発展をめざして. 舘岡洋子（編）『日本語教育のための質的研究入門 ── 学習・教師・教室をいかに描くか』（pp. 3-26）ココ出版.

データファーム（2015）.『WeChat・微信（ウェイシン）公式アカウントガイド BOOK ── WeChat プラットフォーム「公共平台」を徹底紹介［Kindle 版］』データファーム.

トムソン木下千尋（2017）. 外国語学習というチャレンジと実践コミュニティ. トムソン木下千尋（編）『外国語学習の実践コミュニティ』（pp. 3-14）. ココ出版.

鳥井俊祐（2013）. 日本語スピーチ授業におけるピア・フィードバック活動の試み ── 中国の大学生を対象として Polyglossia: The Asia-Pacific's voice in language and language teaching. 25, 141-148.

林義樹（2015）.『ラベルワークで進める参画型教育 ── 学び手の発想を生かアクティブ・ラーニングの理論・方法・実践』ナカニシヤ出版.

深澤のぞみ，陳会林，張鵬（2012）. 日本語教育におけるスピーチ指導の可能性 ── 全中国選抜スピーチコンテスト西北ブロック予選の取り組みを例として『応用言語学研究論集（金沢大学人間社会環境研究科）』5，16-41.

深澤のぞみ，ヒルマン小林恭子（2012）. 日本語パブリックスピーキング能力養成のニーズを探るための基礎調査『金沢大学留学生センター紀要』15，25-43.

藤田朋世，フランプ順美（2009）. ピア・ラーニングの概念を取り入れたスピーチコンテストの試み ── 重慶大学での実践報告『世界の日本語教育』19，199-213.

Holstein, J. A., & Gubrium, J. F. (1995). *The active interview*. Sage Publications.

Literacies, 22, 56-66. (2018). Kurosio Pub. Co., Ltd.

Note

The use of "message cards" for giving participant feedback

A study on "Japanese speech contests" in mainland China

SUGATA, Yohei*　　KOMAZAWA, Chizuru†

Keywords
Japanese language education in mainland China, Japanese speech contests,
message cards, feedback, active interview

* Peking University. *E-mail address*: sugata1987@pku.edu.cn
† Peking University.